第 5 章　熟議が高校生に与える影響

～能力の自己認識とテーマ理解の事前事後を中心として～

1.「熟議」の教育的意義

この数年、高大連携、大学入試に係る改革をはじめ、教育改革が加速している。また、学習指導要領の全面的改訂が諮問され、平成 28 年度内の答申提出に向けて議論が進められている。これまでの改革と異なるのは、理念的な政策から、具体的なものとなっており、実践手法や環境整備にまで踏み込んでいる点である。例えば、教育に携わる者であれば、教育の転換として、教員が「何を教えるのか」から、児童生徒が「何ができるようになるのか」に重点が移っていることは実感しているところである。しかるに、次の問いは、「何をどのように学ぶのか（学ばせるのか）」ということになる。

学習指導要領に沿って編纂された教科書にある知識・技術を伝達することにおいて、「何が理解できるようになるか」についての目標を掲げることはできる。しかし、「何ができるようになるか」、言い換えれば、「どのような能力を身につけられるか」への答えを用意できないということである。すなわち、教え方＝教授法の転換は、能力観の見直しをも求められると言うことができよう。

文部科学大臣からの中央教育審議会への諮問（平成 26 年 11 月 20 日）では、社会や時代の変化を踏まえ、「伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力を身に付けること」（下線は筆者による）を子どもたちに求めている。

そのうえで、「ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすること」（下線は筆者による）が重要であるとしている。

さらに、この視点に基づく学習（教育）方法として、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」の導入や、「そのための指導の方法等を充実させていく」必要があるとしている。

このような国レベルの教育改革の方針から、地域の教育に目を向けるとき、これまでの学校中心の教育にとどまらない、新しい時代に必要な試みが必要となるであろう。兵庫大学の「熟議」は今年で 4 回目を迎えたが、これまで、地域の方々、行政や諸機関の方々、そして高校生、大学生の参加を得て成果を上げてきた。なかでも、高校生に対しては、学校では得ることのできない経験となっていることについて、報告書の分析で明らかになっている。

「学校で学んだ知識や技術がどのように、社会や地域で生かされていくのか」、「生徒自身がそれらをどう活かしていくのか」、そういった視点そのものを高校生に持ってもらうことは重要である。また、地域の課題にどのようにして気づき、他者と共有し、議論するのか、その方法論を知っていることも欠かせない技能である。

さらに付け加えるならば、地域のさまざまな関係者（ステークホルダー）から家族や仲間まで、異なる立場で種々の価値観をもつ人々のなかで、課題解決に向けて協働することができる力を培うことが大切である。まさに、「自立した人間として多様な他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質･能力」（上記の諮問より）をどう育んで行くのかが、今後の地域と学校の大きな課題である。

「熟議」を経験して、高校生のなかにどのような変化が起こっているのか、何を得て、何をどのように活かして行こうと考えているのか。このことを検証していくことは、これからの子どもたちに求められる「21 世紀型能力」「21 世紀型スキル」などをどう捉えるのか、またどう育むのかといった課題の検討にも役立つのではないか。

本章では、このような考え方に立ち、以下の流れで高校生の変化を見ていく。

１．参加した高校生の特徴と「熟議」による変化（事前の状況）
２．自己認識シートの分析（事前事後の変化）
３．高校生は「地域の安全・安心」についてどう考えたか（事前事後の変化）
４．高校生は「熟議」をどのように経験し、どう活かすのか（事後の状況）
５．まとめ　～「熟議」の経験とその効果～

分析では、熟議の事前と事後に行った自己認識シート、事前・事後アンケートを中心に用いる。ただし、あくまでも自己評価であることに留意し、生徒の内部に起こったことを推測するにとどめることとする。

2. 参加した高校生の特徴と「熟議」による変化

本節では、熟議への参加を通して、高校生の自己認識にどのような変化があったのか概観する。兵庫大学の熟議は今年で 4 年目となるが、第 1 回目から熟議の教育的効果に注目し、熟議前後の参加者の変化を測る自己認識シートを開発した。「自主性」「思考力」「会話力」「計画力」「規律性」など 10 項目にわたり汎用的能力の変化を知るためである。

節目を迎えた本年度の報告として、分析には過去のデータも参照し、考察を行う。なお、自己認識シートの回答者は事前では 42 名、事後は 34 名である。また、事前事後アンケートについては、事前では 42 人、事後では 36 人、事前事後の比較では両方に回答した 36 人を対象とする。

(1)「熟議」に参加した高校生の特徴

今回参加した高校生は、加古川地域 2 市 2 町にある公立高校に通う生徒を中心とした 42 名である（男子 27 名、女子 15 名：当日参加者は 36 名）。また、学科でみると、普通科 30 名、その他の学科（専門学科、総合学科など）12 名となっている。これは、昨年同様の比率である。

熟議の高校生に対する影響を見る前に、ここでは、どのような高校生が参加したのか全般的な傾向について押さえておく。

1) 熟議の認知度と参加理由

「熟議」という言葉を「言葉では聞いたことがあった」生徒は 28.6%と、昨年参加した高校生の 25.7%と同等の数値となっている。一方、今回の熟議参加で知ったとする者は 64.3%を占めている【図 5-2-1】。

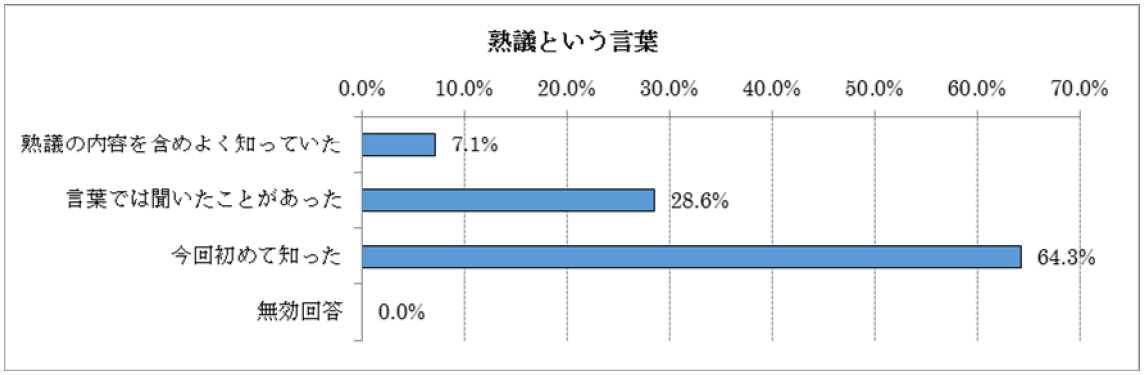

図 5-2-1 熟議という言葉の理解

「熟議 2015 in 兵庫大学」に参加した理由は、「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が 85.7%と、昨年の数値 82.9%と同程度である。しかし、「加古川地域の安心・安全」というテーマに関心があるからは昨年の 20.0%から 2.4% に減っている。一方、「熟議という方法」に関心がある生徒は、昨年の 8.6%から 16.7%へと増加している。全体として、学校の先生に勧められた以外では、イベントとしての熟議、手法としての熟議に関心をもって参加した高校生が多いことが分かる【図 5-2-2】。

なお、「大学が主催する事業に参加したいから」については 2.4 %と非常に低いことから、地域の大学として、近隣の高校および高校生に対して、大学とその活動についての認知度を高めていく必要がある。

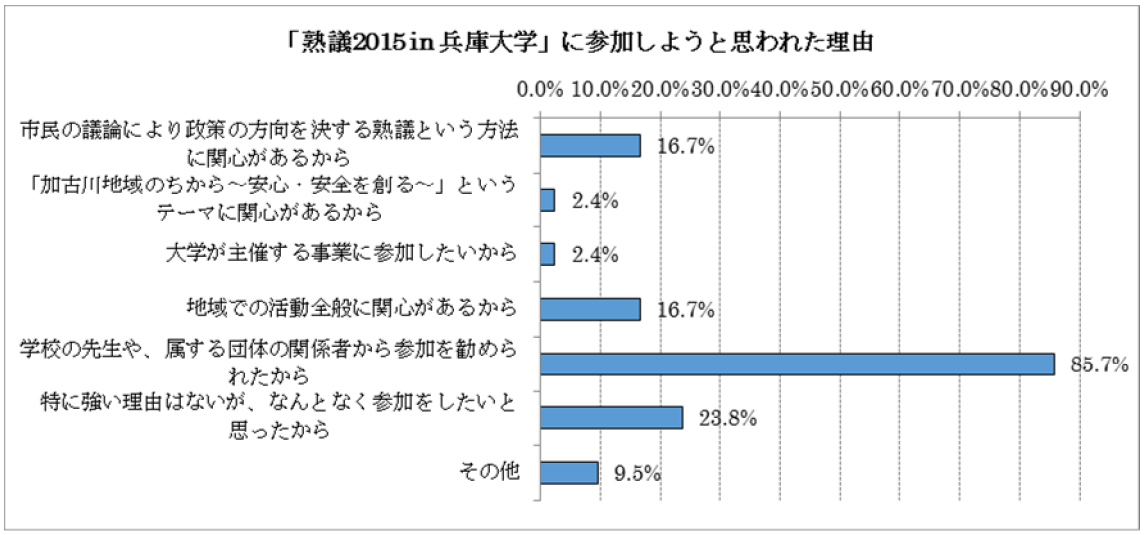

図 5-2-2　「熟議 2015in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由

2) ワークショップ経験と議論形態についての考え方

参加生徒は熟議の本番である「ワークショップ」についてどのような経験をもっているのだろうか。「ワークショップや市民会議、審議会、グループ討議の経験」がほとんどない者が 42.9%（昨年 77.1%）と「現在も多くの機会で経験することがある」11.9%（昨年 0.0%）、「機会が少ないが、現在でも経験することがある」が 28.6 %（昨年 17.1 %）とこれまでに比べ、ワークショップ経験者が比較的多いことがわかる【図 5-2-3】。

今年度の熟議でも昨年に引き続き熟議専用サイトを設け、これまで以上に自主学習のコンテンツを充実させた。その影響もあり、熟議の進め方について「大体は理解することができた」とする高校生は 85.7%（昨年 68.6%）に上っている【図 5-2-4】。また、テーマ内容についての理解も「大体は理解することができた」が 83.3%に上っている【図 5-2-5】。

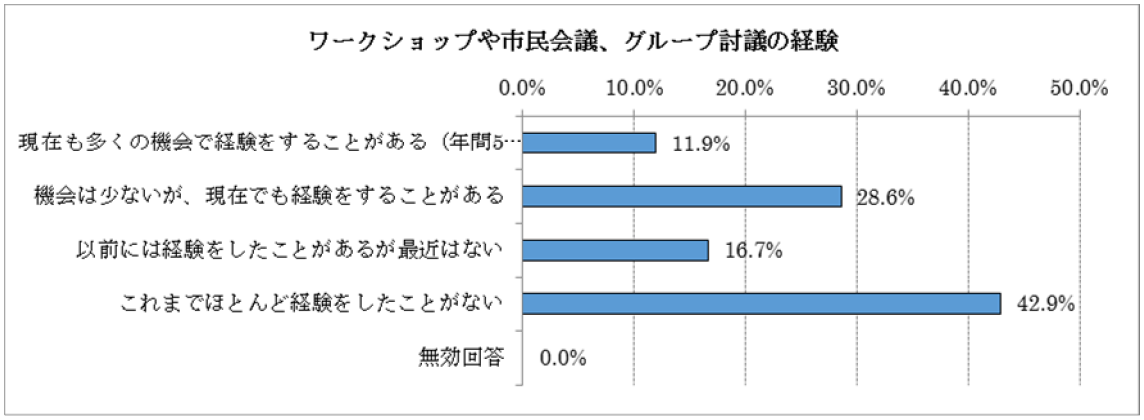

図 5-2-3　ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

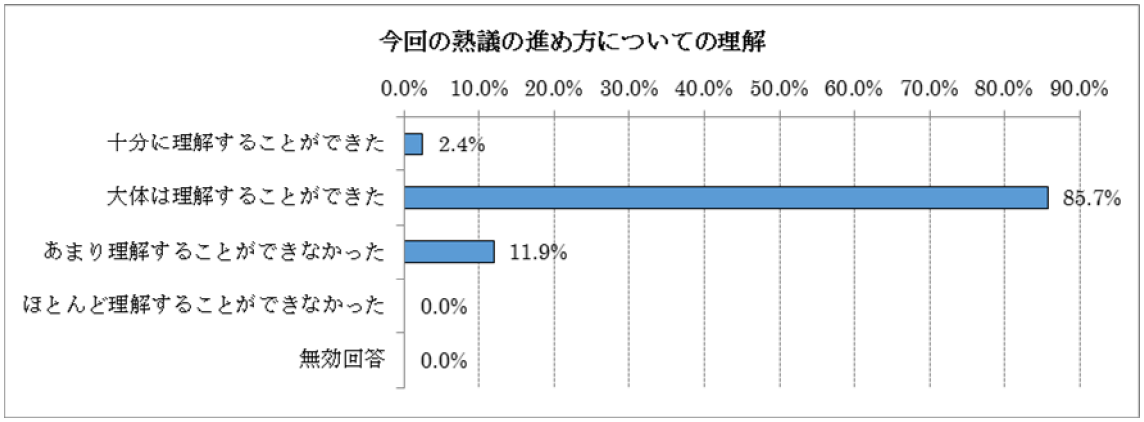

図 5-2-4　今回の熟議の進め方についての理解

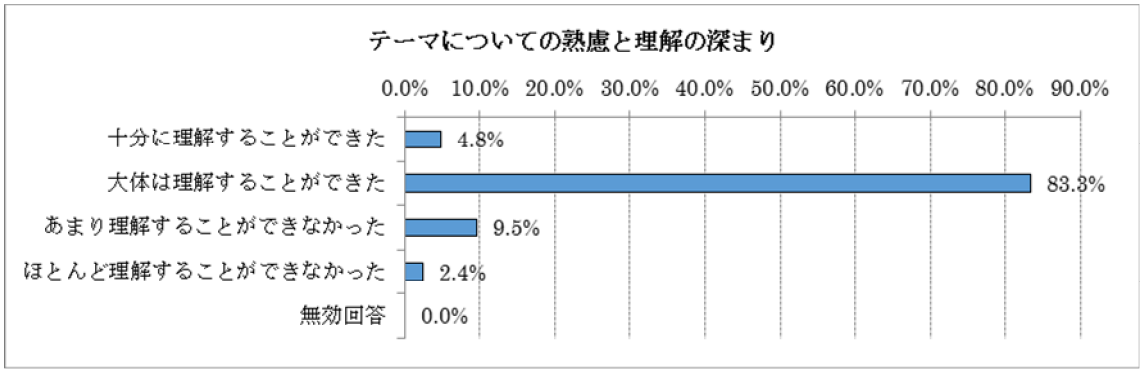

図 5-2-5　テーマについての熟慮と理解の深まり

また、熟議における「議論の段階（当日のテーブルでの討議）」への期待について、「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」とする割合が 47.6%（昨年 37.1%）であり、 昨年を 10 ポイント上回っている。熟議前では、どちらかと言えば「受け身」の態度が見受けられる。ついで「多くの人と交流したり話をすることへの期待が大きい」が 19.0%（昨年 17.1%）となっている。【図 5-2-6】。また、大学生では、「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」とする割合が 36. 4%に上っているのに対して、高校生は 11. 9%にとどまっており参加への構えの違いが読み取れる。

それでは、高校生は、熟議のような議論形態についてどのような考えをもっているのだろうか。「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点について、71.4%が「多様な考えを知る機会がある」（昨年 62.9%）と捉えている。一方、悪い点については、「議論だけではまとまらず決められない」が 31.0%（昨年 17.1%）と昨年に比して高い数値となっている。ついで、23.8%が「立場が上の人の意見に影響されやすい（昨年 34.3%）」と考えている【図 5-2-7】【図 5-2-8】。

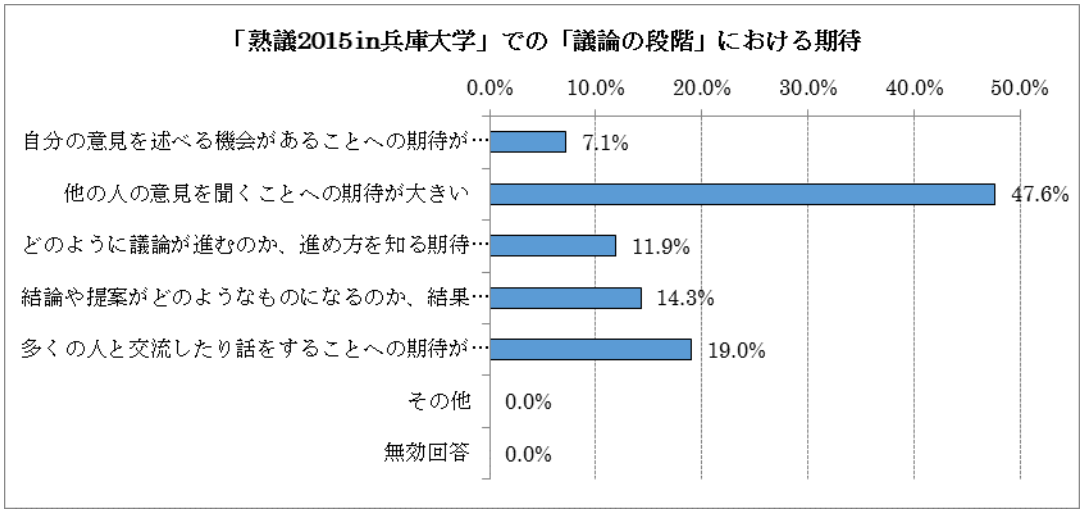

図 5-2-6 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待

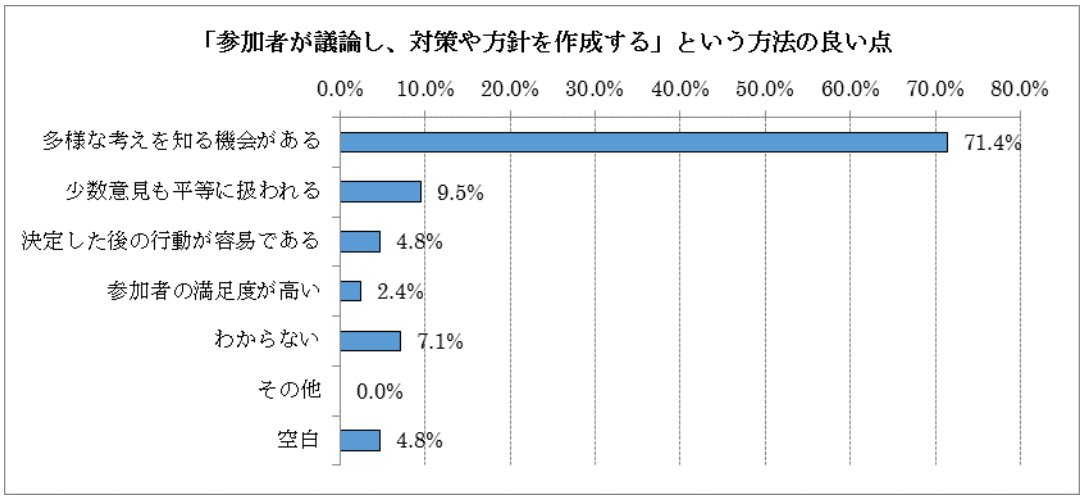

図 5-2-7 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

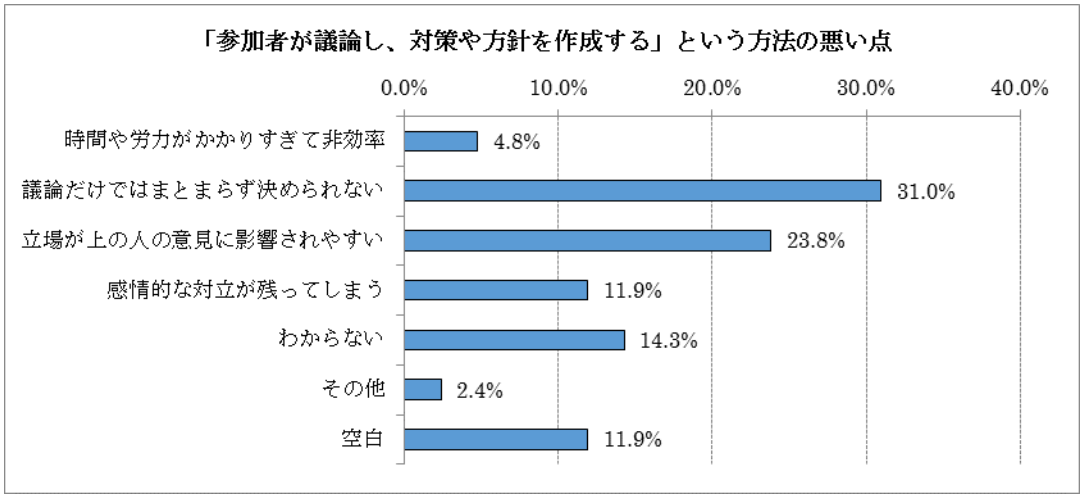

図 5-2-8 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

ここまでのデータを見ると、参加した高校生の 60～70%は「他の人に勧められて参加したが、ワークショップを経験したことがあり、熟議を通して、他の人の意見を聞き、多様な考えや意見を知る機会としたい」ようだ。一方で、熟議の形態について「議論だけではまとまらず決められない」点を悪い点として挙げ、また、年上の学生や年配の人々の意見から受ける影響について心配している様子もうかがわれる。

3) 高校生の未来像

事前アンケートでは、「今から、35 年後の 2050 年において、次の項目に関連して、安心・安全は向上していると思いますか、それとも低下していると思いますか」について、5 段階（5〔向上〕～1〔低下〕）で評価をしてもらっている。「加古川地域のちから」について、現状を認識するうえで将来像を視野に入れて議論をしてほしいとの意図がある。

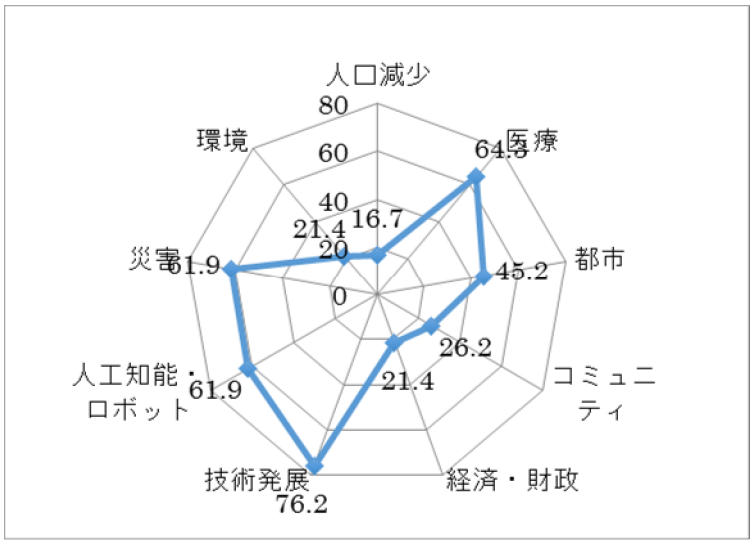

図 5-2-9　2050 年加古川の安心・安全状況についての未来像

項目ごとに、最も多くの人が評価した最大値に着目すると、人口減少は 52.4%が 2、医療について 38.1%が 4 となっている。都市は 42.9%が 3、コミュニティは 54.8%が 3 と中程度の評価が多い。一方、経済・財政について 52.4%が 3、技術発展について 45.2%が 4、人口知能・ロボットについて 4，5 ともに 31.0%である。また、災害について 50.0%が 4、環境について 47.6%が 3 となっている。また、向上度の高い方から評価 5 と評価 4 を足した比率をレーダーチャート（【図 5-2-9】）で見ると、人口問題には悲観的であり、コミュニティや都市の状況や経済・財政状況についても将来に向けて上向きになるとの期待は低い。一方、技術発展については、項目中 4，5 を合わせて 76.2%と、もっとも高い評価となっており、同様に医療、人工知能・ロボットについても評価が高い。一方、環境については低い評価となっている。

高校生の年齢においては、知識や情報の限界もあり、全般的に「技術に強い日本」「ノーベル賞を取れる日本」など印象レベルの評価であることは否めない。しかし、漠然とであれ、人口減少への危機

感、経済状況への不安など高校生なりに感じ取っていることがうかがわれる。また、災害については、60%近くが 4，5 と評価しており、今後の改善への期待の表れであると解釈できよう。

(2)「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか

1)自己認識シートにおける事前評価　～「自主性」「規律性」をもつ高校生の参加～

熟議に参加する高校生に熟議の前と後で、能力に関する自己評価をしてもらっている。以下の【図 5-2-10】【表 5-2-1】を見ると、実施前で自己評価が高い項目は、第一位は「規律性」の 3.65、第二位は「自主性」「運営力」3.47、第三位は「会話力」3.41 である。過去に遡って同データを見ると、2014 年は第一位「規律性」、第二位「自主性」、第三位「会話力」「実行力」、2013 年は第一位「規律性」、第二位「自主性」、第三位「対応力」となっている。まとめると、熟議に参加する高校生は「自主性」「規律性」について自己評価の高い者が多いと言える。「物事に進んで取り組み、社会のルールや人との約束を守る」高校生が、熟議のような地域で行われる行事に関心を持ち、積極的に参加していることが予想される。

(注)自己認識シートにおける各「能力」の説明

自主性：物事に進んで取り組む力、**思考力**：問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力、**実行力**：目標に向かって行動する力、**対応力**：状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力、**交渉力**：人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力、**会話力**：相手と意思疎通を図る力、**計画力**：現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力、**規律性**：社会のルールや人との約束を守る力、**運営力**：違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力、**貢献性**：社会の担い手として役割を自覚して、参画する力（以下、事前事後比較表内の二重線は数値の高い方から第一位、第二位、一重線は低い方から第一位、第二位。また、増減について、太字は変化率が高い項目、斜字は低い項目である。）

能力 項目	実施前 平均	実施後 平均	増減
自主性	3.47	3.91	*+0.44*
思考力	3.15	3.82	+0.68
実行力	3.36	3.85	+0.49
対応力	3.32	4.03	+0.71
交渉力	3.09	3.76	+0.68
会話力	3.41	3.91	+0.50
計画力	3.18	4.00	+0.82
規律性	3.65	4.00	*+0.35*
運営力	3.47	3.94	+0.47
貢献性	3.12	3.71	+0.59

表 5-2-1　事前事後の自己認識の変化

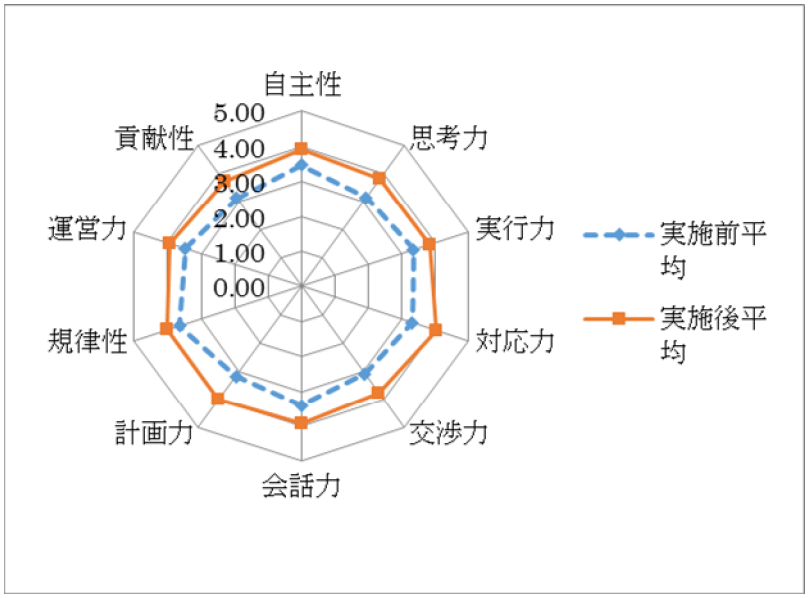

図 5-2-10 事前事後の自己認識の変化

2) 自己認識シートにおける事前と事後の変化　～「計画力」「対応力」が伸びる～

それでは、事後において自己認識シートでの評価はどのようになっているだろうか。レーダーチャート【図 5-2-10】で全体を見ると、どの項目でも能力が伸びたと評価していることがわかる。【表 5-2-1】の増減を見ると、第一位は「計画力」の+0.82、第二位は「対応力」+0.71、第三位は「思考力」+0.68 である。今年度の熟議では、熟議 HP 上の資料を読み、考え、課題に答えるといった「熟慮」プロセスを経験した後、本番の「議論の段階」に臨まなければならないことから、時間を有効に用いて準備を進める必要があった。また、本番では、大学生のほか、地域の住民、行政の方々など大人の意見に耳を傾けるだけでなく、各テーブルで対等な立場で発言する状況に置かれた。このような経験がこの結果に反映していることが考えられる。

同様に、過去 3 年間の熟議に参加した高校生の比較で見るとどうであろうか【表 5-2-2】。全体として、開催年によって違いが見られる。2014 年では、「思考力」がもっとも伸び、「対応力」がそれに次いでおり、2015 年と同様の傾向が見られる。しかし、2013 年では「貢献性」がもっとも伸び、「交渉力」「規律性」がそれに次いでいる。2013 年は、高校生に対して与えた課題は社会人と同様、加古川地域の未来について考えるための「事前熟慮メモ」のみであり、「ふるさと」「加古川地域の“強み”と“弱み”」を中心としたレポート形式の課題に答えるものであった。事前学習というよりは、各人の考えをまとめるにとどめたものであったと言えよう。

以上より、議論の前にしっかりと熟慮を行うかどうかが、能力の自己評価に影響を与えることが予測される。高校生に対しては、事前課題の内容や形態について工夫を行い、「計画力」「思考力」をさらに伸ばしていくことは可能ではないか。また、熟議本番であるワークショップが「対応力」獲得の手応えを与えているのではないかと予想されることから、今後、高校生が参加しやすい熟議形態を検討していくことも課題の一つと言えよう。

事前事後の自己認識評価の増減（事前事後両方に回答した高校生）

能力項目	2015（34 名）	2014（32 名）	2013（27 名）
自主性	*+0.44*	+0.34	+0.41
思考力	+0.68	+0.66	+0.30
実行力	+0.49	+0.50	+0.48
対応力	+0.71	+0.53	*+0.07*
交渉力	+0.68	*+0.28*	+0.63
会話力	+0.50	+0.31	+0.48
計画力	+0.82	+0.41	*+0.11*
規律性	*+0.35*	+0.34	+0.52
運営力	+0.47	*+0.06*	+0.26
貢献性	+0.59	+0.44	+0.67

表 5-2-2　事前事後の自己認識評価の増減（経年）

※太字は伸び率の高い方から第 3 位まで、斜字は低い方から第 2 位までを表している。

3) 事前と事後の変化　～大学生との比較～

それでは、事前事後の変化は、大学生と比較してどのような結果となっているだろうか。大学生参加者は、ファシリテーター（12 人）とワークショップの参加者（11 人）に分けられる。役割が異なることから、ここでは分けて分析を行う。全体として、両者ともに高校生と同様、どの能力項目においても事前よりも事後で能力が伸びたと評価している。

ファシリテーターの学生は、第一位は「運営力」の+1.25、第二位は「計画力」「貢献性」+1.00、第三位は「交渉力」「会話力」+0.92 であり、能力項目 10 項目のうち半数が過去には見られないほど高い変化率となっており、熟議のファシリテーターを経験したことによる大きな効果が見て取れる。一方、ワークショップ参加学生では、第一位は「交渉力」の+1.09、第二位は「対応力」+1.00、第三位は「運営力」+0.91 となっている。これらの数値も例年のワークショップ参加者に比して高い変化率となっている。

ファシリテーターでは、やはり「違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力」である「運営力」の数値が最も高く、「現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力」（計画力）、「社会の担い手として役割を自覚して、参画する力」（貢献性）がそれに次ぐ。一方、ワークショップ参加学生は、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」（交渉力）が最も高くなっており、「状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力」（対応力）が次いで高い。それぞれの役割に応じた能力の伸びを自覚できている様子がうかがわれる。

高校生が「対応力」が高い傾向は大学生の参加者と同様であるが、異なる立場の人々とチームワークよく作業や討議を進めることについて手応えは得られていないようだ。一方、「計画力」が高いのはファシリテーターと同様の傾向である。ファシリテーターのリードにより、解決に向けて筋道を立てる手法から得たものがあることが推測される。

3. 高校生は「地域の安全・安心」についてどう考えたか

本節では、熟議参加を決めた後、熟議の事前準備としての「熟慮」の時期に行う「事前アンケート」と熟議当日の議論を終え、「熟議」すべてを経験した後に行う「事後アンケート」の比較を行う。「熟議」という経験を通して、熟議への構え、テーマに対する意見がどのように変化したのかを考察する。「協働を目指す対話」である熟議の成果が、どのように現れているかについて見ていくことが目的である。

なお、データを比較することから、参加者のうち事前および事後のアンケートの両方に回答した高校生のみを対象とする。

(1)「熟議」への期待　～「議論の段階」における期待と成果～

熟議参加への期待として「自分の意見を述べる」について、事前では 8.3%と消極的であったが、事後では 30.6%と大幅に増加している。一方、「他の人の意見を聞く」に変化は見られないが、事前で 47.2 %、事後で 44.4%と【図 5-3-1】の 5 項目中最も高い数値となっている。一方、議論の進め方や結論・提案の方向性についてはそれほど関心が高いとは言えない。事後の結果は、事前よりさらに数値が下がっており、高校生の経験として、「自分の意見を述べる」ことができたことの充実感が優っていることが表れているとみることができよう。また、「多くの人と交流したり話をする」についても、事前で 22.2%、事後で 16.7%とある程度の期待が読み取れる。

高校生は、熟議への構えとして「他の人の意見を聞く」として参加したが、実際には、それだけでなく「自分の意見を述べ」、「多くの人と交流したり話をする」経験をしたと言えよう。

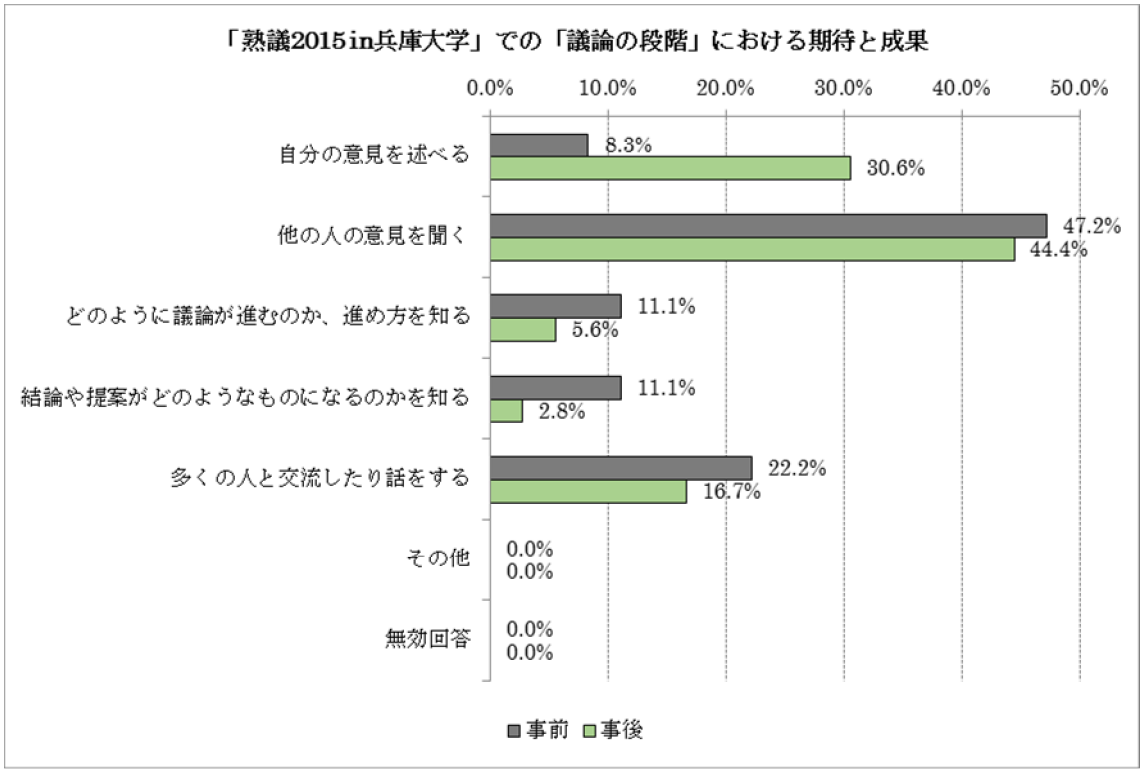

図 5-3-1　熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

(2)「地域の安全・安心」に関する意見の変化　～熟議前と熟議後～

今年のテーマは「加古川地域のちから　～安心・安全を創る～」に関わり、10 項目のサブテーマを設定した。以下では、それらについての意見が熟議前と熟議後でどのように変化したのか見ていく。

10 項目それぞれについて、賛成か反対かをたずねた結果を検討し、さいごにこれらの項目を全体として考察する。なお、選択肢の 5 段階尺度のうち、「大いに賛成」と「やや賛成」の合計を「肯定派」とし、「大いに反対」と「やや反対」の合計を「否定派」として分析に用いる。

1）項目別の変化

①「人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」

高校生では、「大いに賛成」が事前では 52.8%であったが、事後には 75.0%に増加した【図 5-3-2】。熟議での意見交換を通する体験を通して、人々のつながりの重要性を実感したと思われる。

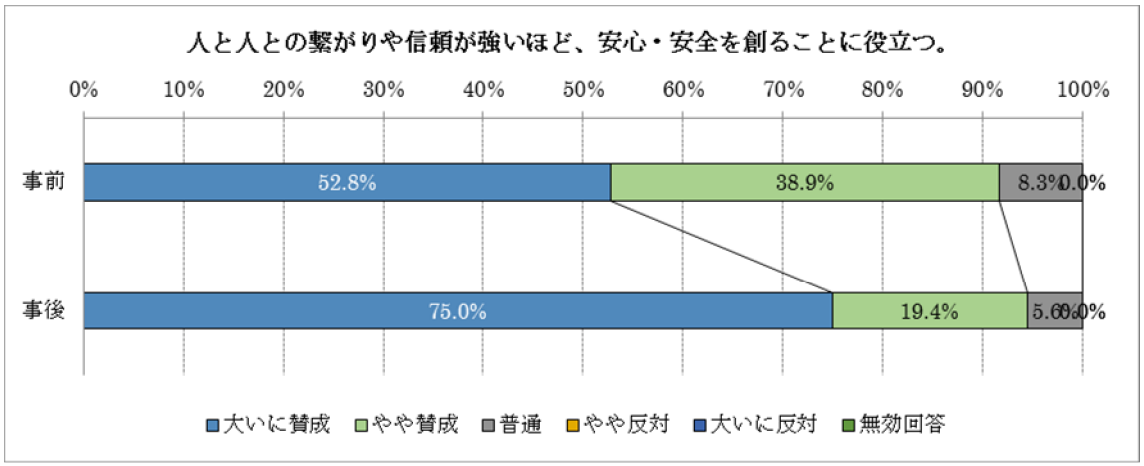

図 5-3-2　人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ。

②「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」

事前では、「大いに賛成」が事前では 16.7%であったが、事後には 58.3%へと大幅に増加した。熟議の経験により、住民が同じテーブルを囲み、顔と顔を突き合わせて意見交換することが安心・安全につながっていくのではないかとの認識をもった様子がうかがわれる【図 5-3-3】。

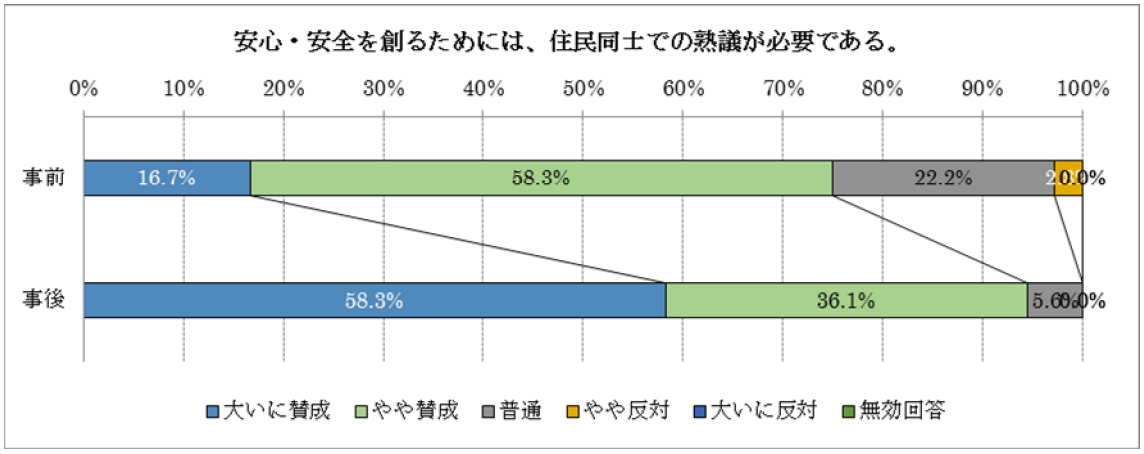

図 5-3-3　安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である。

③「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」

事前では、「大いに賛成」「やや賛成」の「肯定派」は 30.6%であり、事後では 27.8%とあまり変化はみられない。一方、「住民の役割は限定されていない」と考える「否定派」も、47.2%から 44.4%へと変化はみられない。「住民の役割」の重要性は事前事後に関わらず認識されていることがわかる【図 5-3-4】。

テーブルでは、「住民 対 行政」といった二項図式や「安心・安全」はどのステイクホルダーの責任かといった議論が多くなかったことの表れとも解釈できよう。

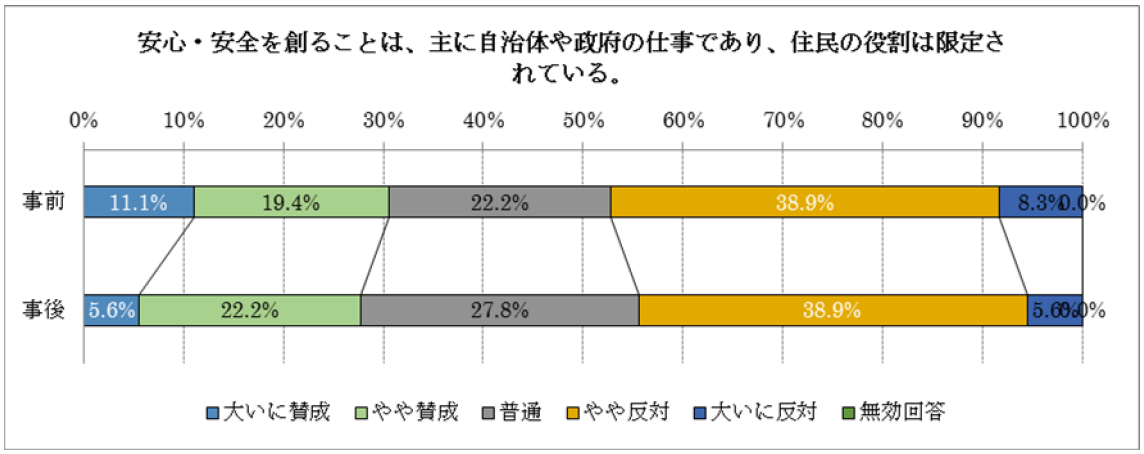

図 5-3-4　安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。

④「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」

一人ひとりの能力向上について、「肯定派」は事前の 72.2%から 61.1%へと 10 ポイント近く低下している。安心・安全を創ることの議論が、「一人ひとりの能力の向上」と結びつけられなかったことがうかがわれる。どちらかといえば、ネットワークの力、協働の力の必要性について印象が強かったのではないかと予想される【図 5-3-5】。

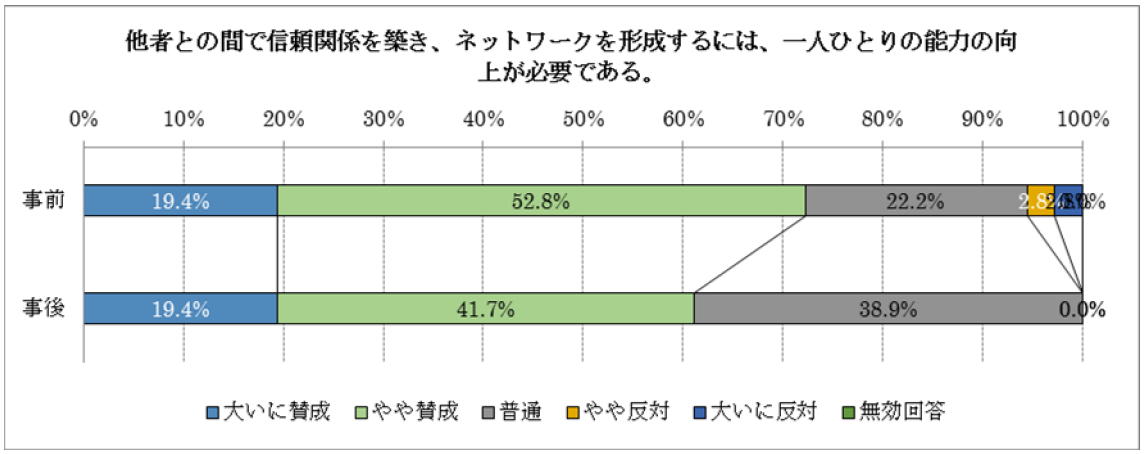

図 5-3-5　他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である。

⑤「安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」

「肯定派」は事前の 33.3%から 41.7%へと 10 ポイント近く増加している。一方、「否定派」は 22.2%から 19.4%へと減っている。「ひと」の協力だけでなく、「もの」の必要性についての気づきがこの数値に表れていると読むことができよう【図 5-3-6】。

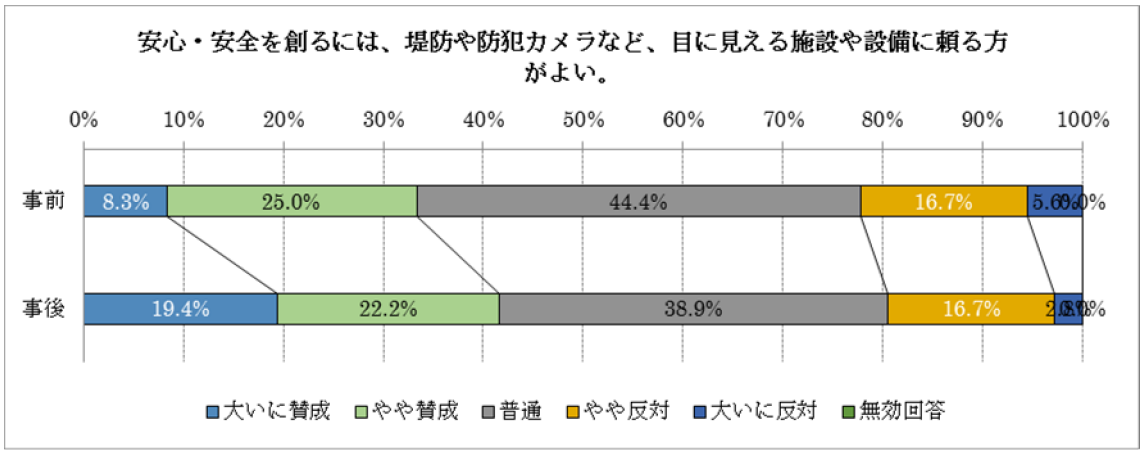

図 5-3-6　安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい。

⑥「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」

「大いに賛成」は 27.8%から 47.2%へと大幅に増加している。事後では、「やや賛成」と合わせると「肯定派」である 90%近くがコミュニティでの日常的な活動の重要性を感じていることが分かる【図 5-3-7】。

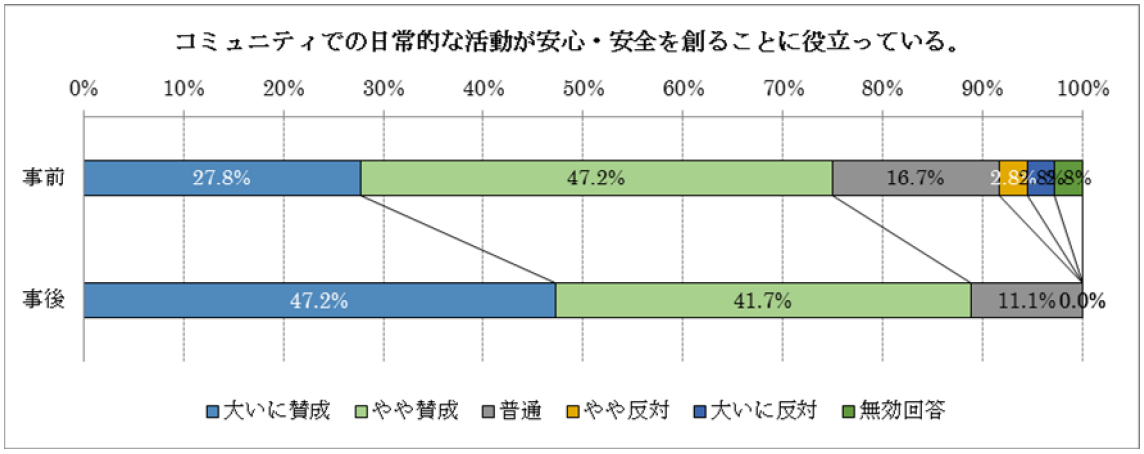

図 5-3-7　コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている。

⑦「行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」

「大いに賛成」は事前でも 61.1%に上っているが、事後でも増加して 66.7%となっている。事後では、「やや賛成」と合わせると「肯定派」は 100%に上っており、高校生は住民同士の助け合いの必要性を十分に理解していることが分かる【図 5-3-8】。

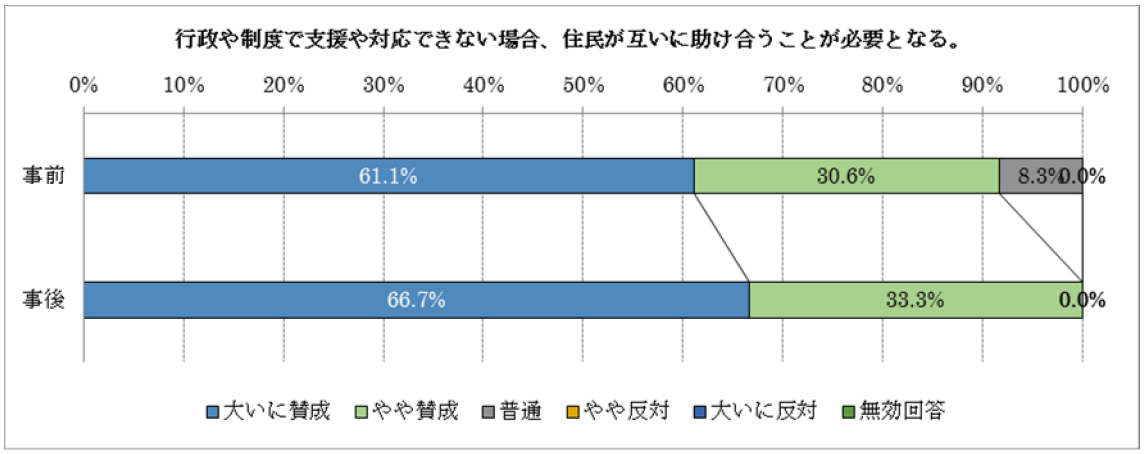

図 5-3-8　行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる。

⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」

「肯定派」は事前の 11.1%から事後の 27.8%へと 15 ポイント近く増加している。一方、「否定派」は事前の 52.8%から事後の 33.3%へと 20 ポイント近く減少している。議論を経て、不便があっても安心・安全のためには致し方ないという認識が高まったことが分かる【図 5-3-9】。

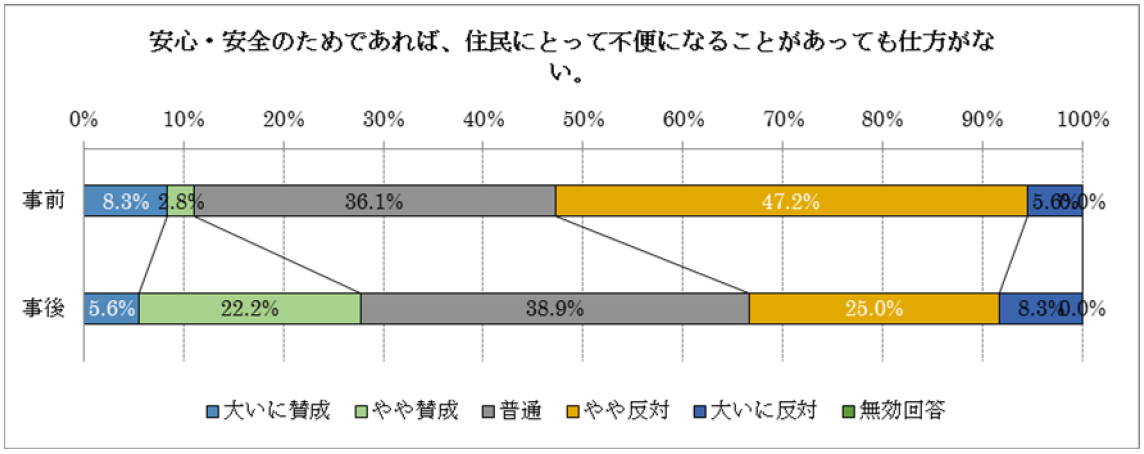

図 5-3-9　安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない。

⑨「安心・安全を創るのは、地の人の役割であり、風の人は関わらないものである」

「肯定派」は事前の 19.4%から事後の 13.9%へと減少している。一方、「否定派」は事前の 61.1%から事後の 47.2%へと 15 ポイント近く減少しており、否定派の変化が大きい。安心・安全を創るとき「地の人」か「風の人」かと問われれば、どちらかと言えば、地の人の役割が重要との認識が高まったことがうかがわれる。【図 5-3-10】。

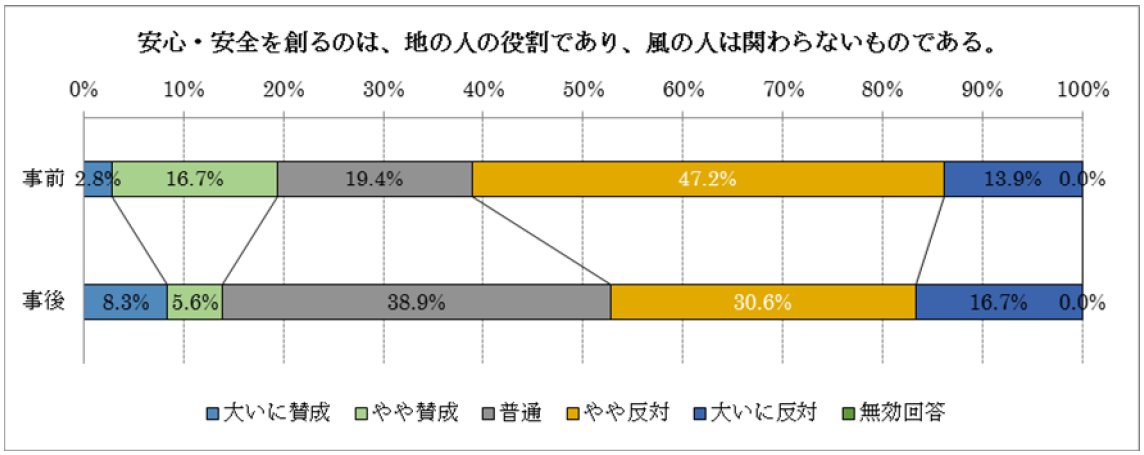

図 5-3-10　安心・安全を創るのは、地の人の役割であり、風の人は関わらないものである。

⑩「大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」

「肯定派」は事前の 36.1%から事後の 44.4%へと増加しているが、全体としては大きな変化はない。大学が「安全・安心」とどう関わるのかについて、高校生にとっては関連性がわかりにくかったのではないかと推測される【図 5-3-11】。

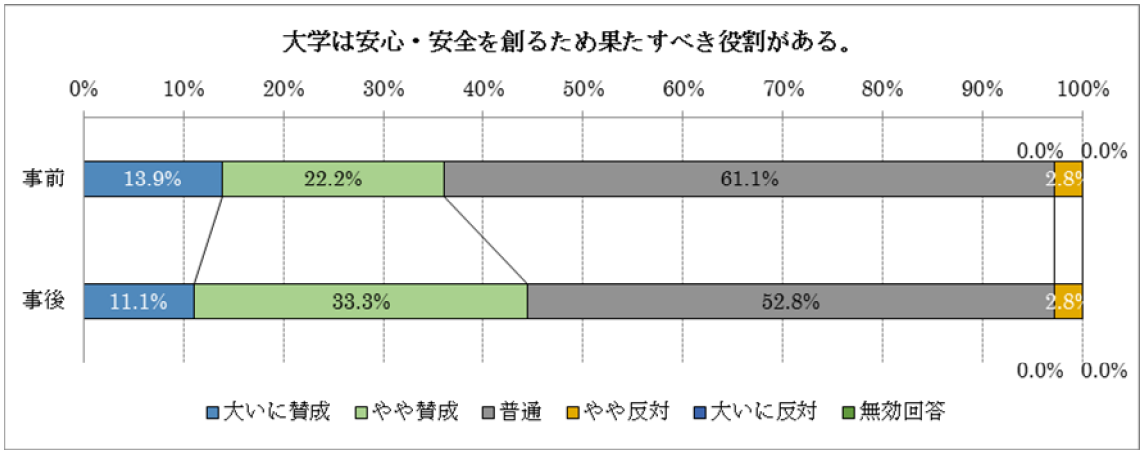

図 5-3-11　大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある

2) 全体の考察

【図 5-3-12】は、上で個別に考察した 10 項目について、「大いに賛成」を 5、「やや賛成」を 4、「普通」を 3、「やや反対」を 2、「反対」を 1 として平均を算出したものである。地域の安心・安全についての考え方について、熟議の前と後で目立った変化がみられるのは、「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」（+0.64）と「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」（+0.39）、「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」（+0.31）である。

熟議の経験を通して、高校生のなかで起こった最も大きな変化は地域の安心・安全のためには、「住民同士の熟議の必要性であること」について認識が高まったことである。また、コミュニティでの日常的な活動の重要性を感じるとともに、安心・安全のためには住民に不便になることを受け入れなければならないといった、「コミュニティの一員としての責任感」の必要性を再認識したと言えよう。

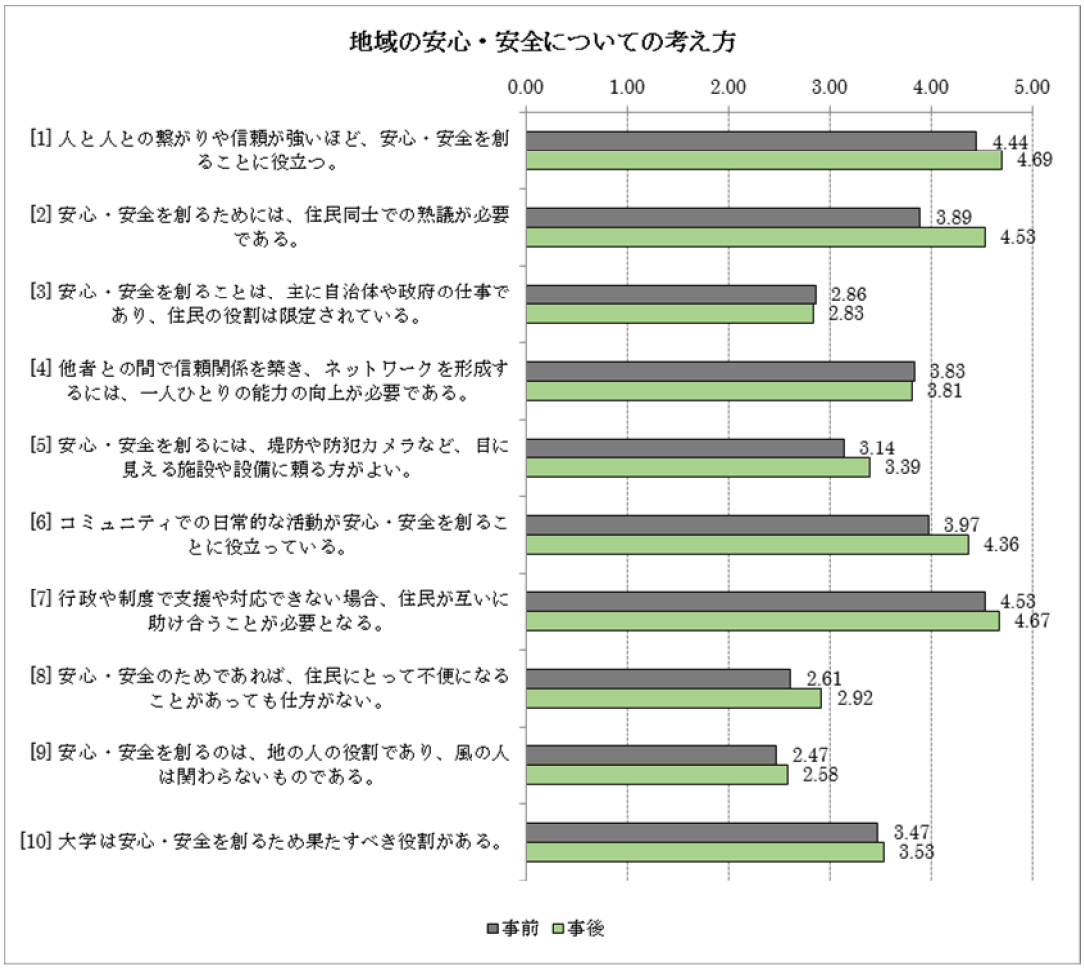

図 5-3-12　地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

4. 高校生は「熟議」をどのように経験し、どう活かすのか

本節では、事後アンケートから、参加した高校生が熟議を通して学んだこと、経験したことを今後にどう活かそうと考えているのかみていく。事後に回答した高校生は 36 名である。

(1)「熟議」の満足度

熟議の満足度は、「とても満足」が 80.6%となっており、全体として非常に高い。「まあ満足」の 19.4%を合わせると、高校生全員が熟議の一連の経験と学びを充実感を持って捉えていることが分かる【図 5-4-1】。

自主学習による事前の熟慮、地域の人々や大学生との交流、テーマにしたがって課題を抽出するといった討議方法など、学校の学びでは得られない体験として印象づけられている様子がうかがわれる。

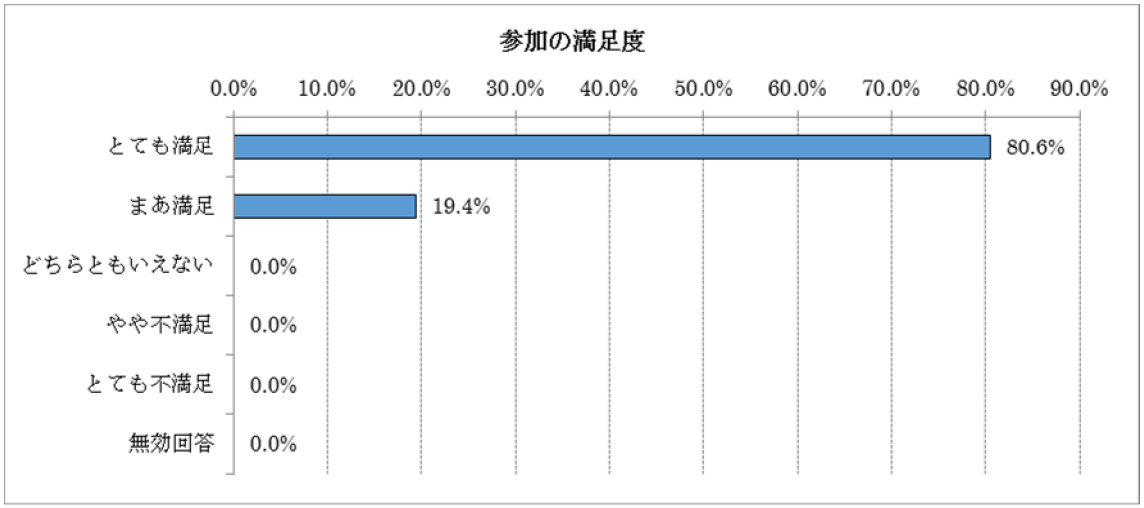

図 5-4-1　参加の満足度

(2)「熟議」経験の活用

それでは、高校生はこの経験を今後の生活や学びに活かしていくことを考えているのだろうか。【図 5-4-2】で、「熟議の経験を今後の活動で活かしたいか」について、「積極的に活かしたい」が 47.2%となっている。約半数が熟議の経験をそのままにせず、何らかのかたちで活かして行きたいと考えていることが分かる。また、「機会があれば是非活かしたい」についても 52.8%となっていることから、熟議の成果を次につなげようとする高校生の強い意欲が感じられる。

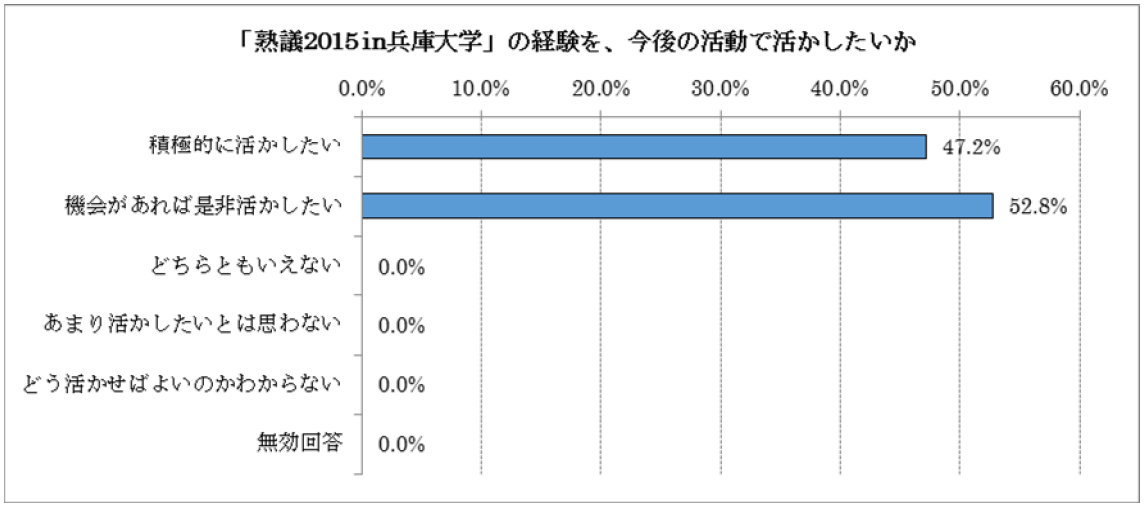

図 5-4-2　「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか

(3)「熟議」の討議形態に関する意見

熟議で経験したことについて、とくに熟議の討議形態に焦点を当て、高校生が何を感じたのかについて見ていく。熟議は地域の課題の抽出、共有、深化といったプロセスにおいて協働し、その結果を地域づくりやネットワークづくりにつなげていくことをめざしている。中学生や高校生であっても、その立場は尊重され、生徒なりに考え、発言することができる。そして、その内容は共有される。このような熟議は、民主主義的ルールに則った実験場でもあり、選挙権年齢が 18 歳以上となり市民性教育（シティズンシップ教育）の重要性が高まるなか、有効な方法の一つとして注目できよう。

①「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」

まず、「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」について 5 段階評価でたずねた。結果は、「非常に思う」が 33.3%、「思う」が 50.0%と、熟慮の段階が議論の段階の準備として効果があったことを示している【図 5-4-3】。

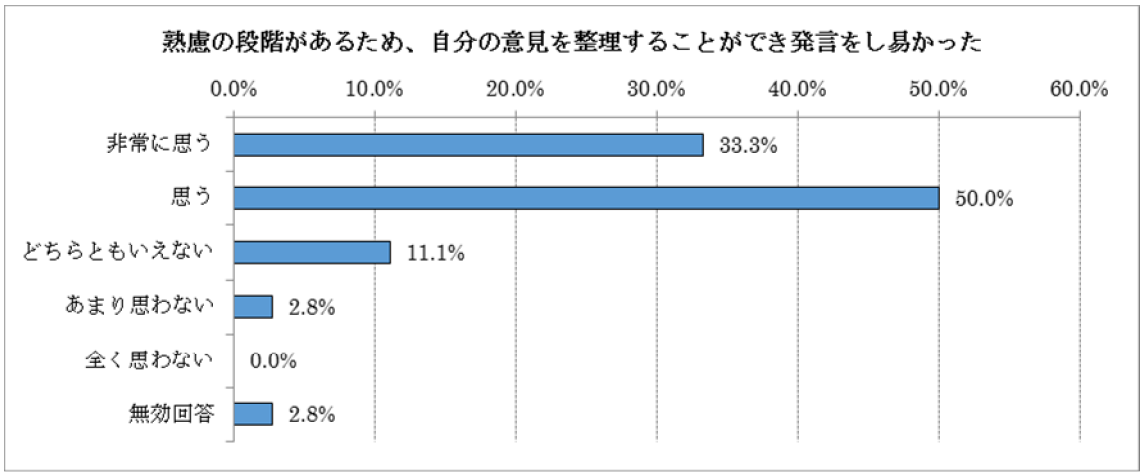

図 5-4-3　熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった

②「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」

熟慮の段階が、当日の議論を促進するために十分な「共通の基盤」ができていたか。これについては、「非常に思う」が 44.4%、「思う」が 47.2%となっている【図 5-4-4】。合わせると 90%を超える高校生が話し合いのための共通の基盤ができていたと感じている。熟慮の段階として、事前アンケートが自分自身の意見や考えをまとめるツールとしてだけでなく、地域をめぐるテーマの範囲や方向性についての情報を確認したり、共有したりすることにつながっていることが予想される。また、ウェブ上で、共通の学習資料により、議論で必要となる用語表現や定義を学んだことの影響も見て取れる。

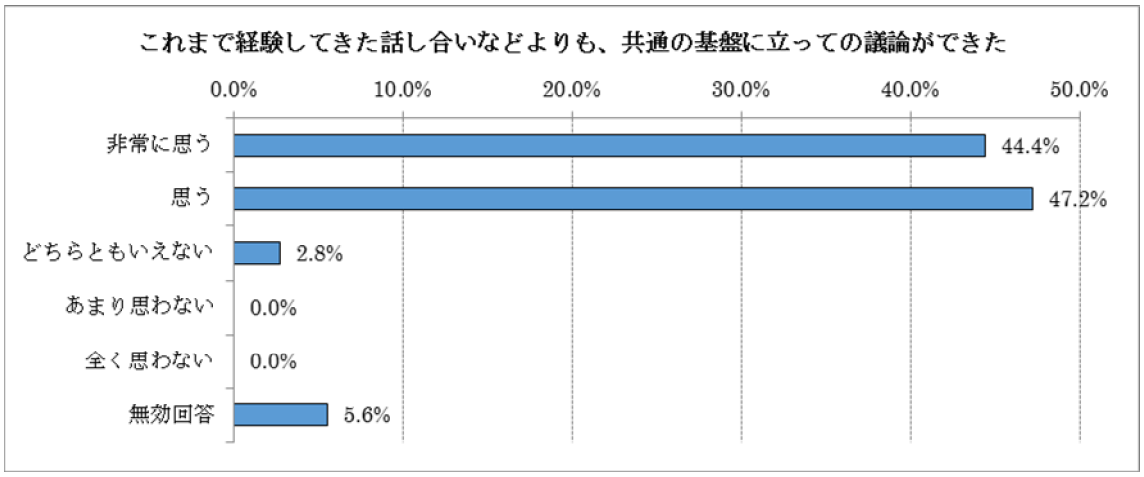

図 5-4-4　これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた

③「熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった」

つぎに、「加古川地域のちから」というテーマそのものについて、高校生がより関心を持つ機会となったのかどうかについて尋ねた。「非常に思う」が 44.4%、「思う」が 41.7%となっている【図 5-4-5】。合わせると 85%近くの高校生が、「地域の課題とはなにか」「地域をどうしたらよいのか」といったテーマに対して、より関心が高まったとしている。

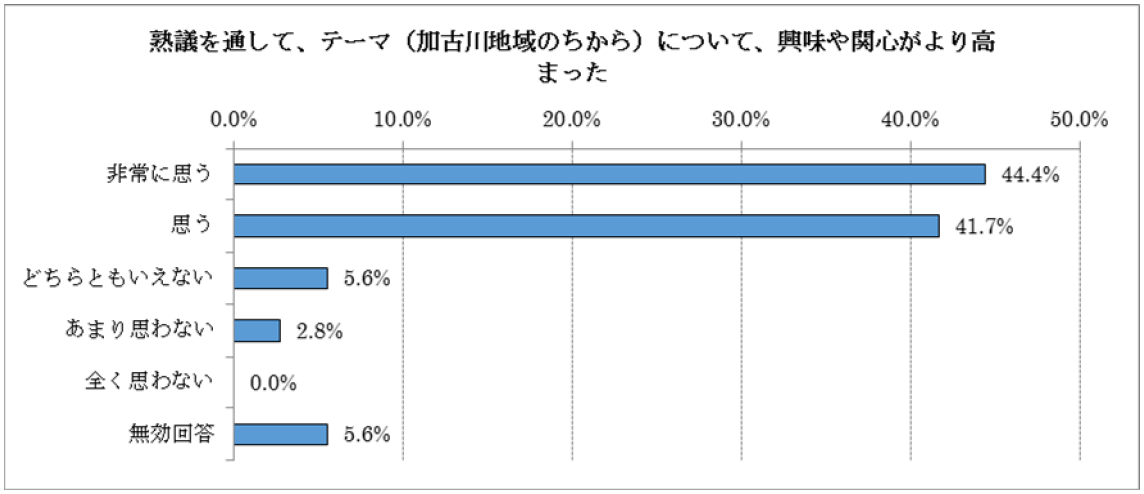

図 5-4-5　熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった

(4)「熟議」が促進する高校生の自己変化

①「議論の内容が充実しテーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった」

つぎに、熟議に参加したことにより、テーマに関する知識を深める機会となったかについてたずねた。「非常に思う」が 52.8%、「思う」が 38.9%となっている【図 5-4-6】。合わせると 90%を超える高校生が、「地域のちから」に関する知識を深めたとしている。実際に議論をしてみると、安心・安全にも災害や事故だけでなく、食品や環境など幅広い領域があること、また、安全度を高めていくために地域のだれがどのように行うかについて、さまざまな課題があることなど、テーマを深められたのではないか。

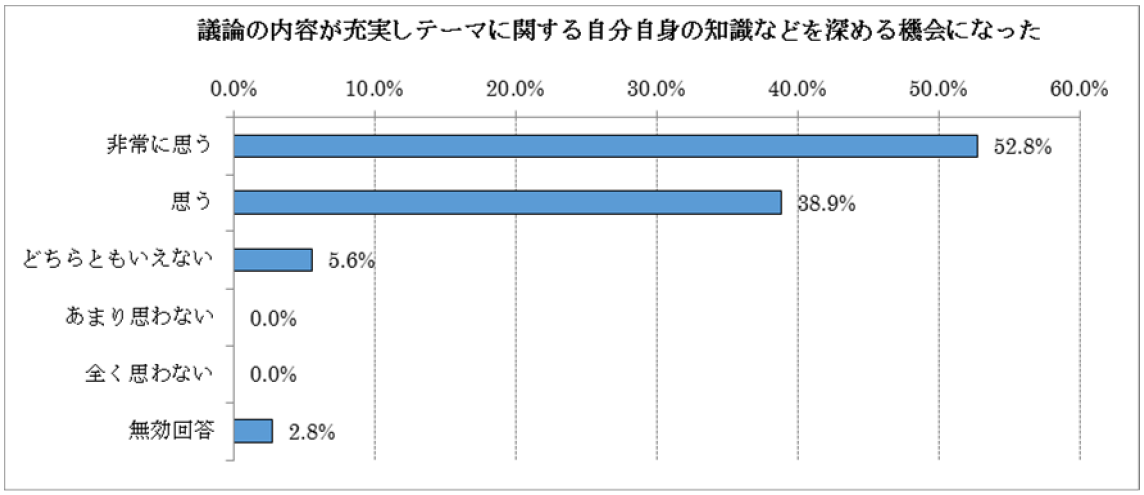

図 5-4-6

②「課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った」

それでは、熟議に参加したことが、単に交流や討議それ自体を目的とするにとどまらず、地域の課題解決に向けて「自ら実行することの重要性」の気づきにつながっているかどうかについてはどうであろうか。「非常に思う」が 52.8%、「思う」が 38.9%となっている【図 5-4-7】。合わせると 90%を超える高校生が、知識を深めるだけでなく、自ら実行していくことの重要性を自覚している。

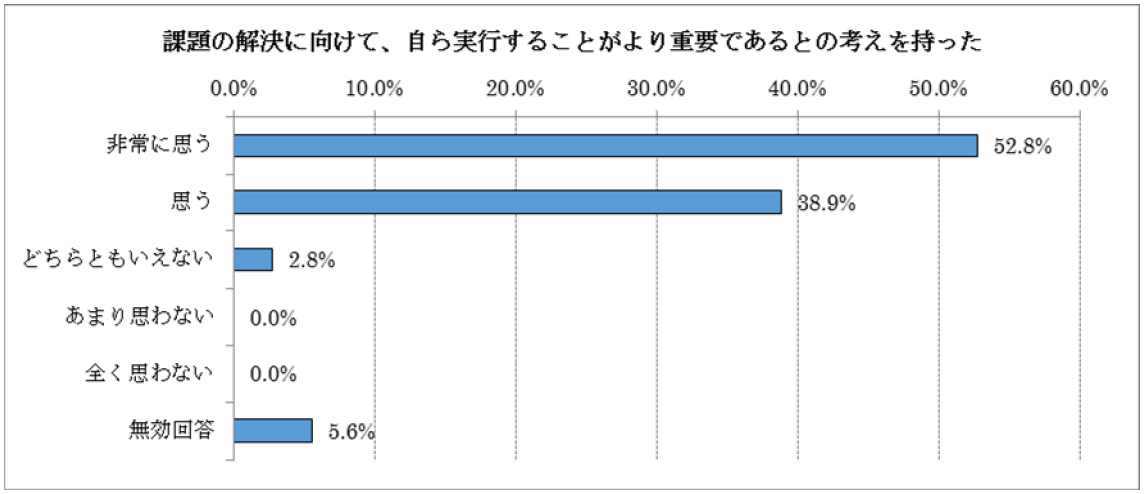

図 5-4-7　課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った

③「最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」

さいごに、議論の段階の影響について、「最初に持っていた自分の意見が変化したか」たずねた。「非常に思う」が 33.3%、「思う」が 52.8%となっている【図 5-4-8】。合わせると 85%近くの高校生が、議論を経て、はじめに持っていた自分の意見に何らかの影響があったとしている。

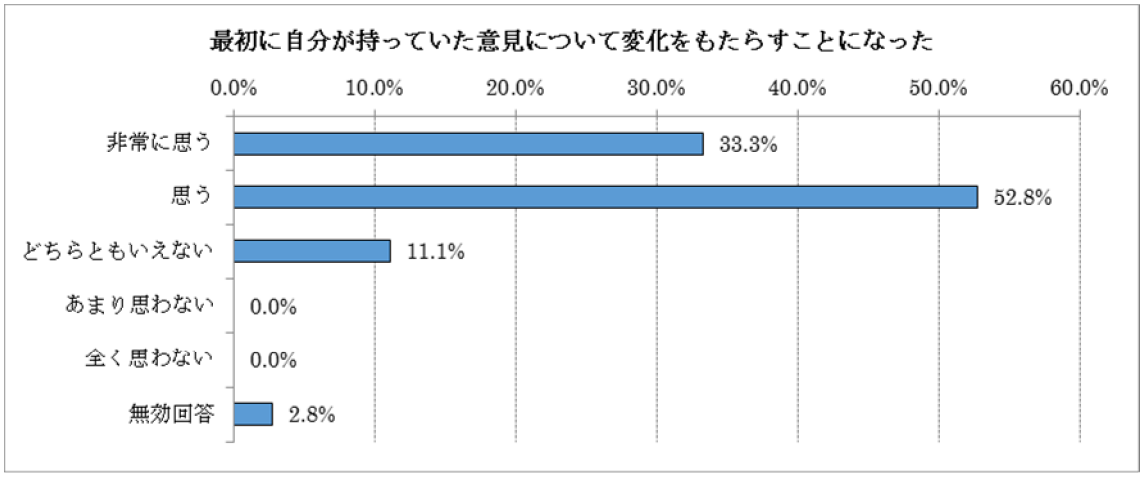

図 5-4-8　最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった

5. まとめ　～「熟議」の経験とその効果 ～

本章では、「熟慮の段階」「議論の段階」の前後に行った自己認識シートおよび事前と事後のアンケートをもとに、熟議が高校生に与える影響について見てきた。本節では、これまでの分析を総括する。なお、テーマに関する質問項目の内容を以下に、模式図【図 5-5-1】として示しているので参照されたい。

まず、変化や効果などの影響を見る前に、どのような高校生が参加したのか把握する必要がある。参加した高校生は、「熟議」という言葉をはじめて聞いた者が 64.3%を占めている。したがって、自ら参加を決めたというよりは、学校の先生に勧められた者が 85.7%に上る結果となっている。しかし、事前アンケートでは、ホームページの学習資料等を通じて、熟議の進め方やテーマについて「大体理解できた」とする者が 80%以上と多数を占めている。また、「議論の段階」に対しては、約半数の者が「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」とし、「多様な考えを知る機会」と捉えている者が 70%に上っている。

また、未来像については、人口問題には悲観的であり、コミュニティや都市の状況や環境、経済・財政状況についての期待は低い。一方、技術発展、医療、人工知能・ロボットについては高い期待を寄せている。

このような高校生が熟議を経験した後、能力の自己評価ではどの項目に変化が見られたのだろうか。今回の熟議に参加した高校生は、「自主性」「規律性」について自己評価の高い者であると言える。事前と事後の比較でみると、まず、どの項目でも能力が伸びたと評価していることがわかる。つぎに、項目ごとの増減で見ると、第一位は「計画力」、第二位は「対応力」、第三位は「思考力」である。

今年度の熟議では、熟議 HP 上の学習資料を読み、考え、課題に答えるといった比較的時間を割かねばならない「熟慮」プロセスを用意した。「自主性」「規律性」をもった高校生は、限られた時間を有効に用いて、きちんとこれらの課題を理解し取り組んだ様子である。「計画力」の評価が高まった所以である。また、本番では、大学生のほか、地域の住民、行政の方々など大人の意見に耳を傾けるだけでなく、各テーブルで対等な立場で発言する状況に置かれた。このような経験が「対応力」を高めたことが予想される。

今回の議論は、一つの結論に導くことを意図したものではない。各テーブルの一人ひとりがしっかりと考えること自体が目的の一つであった。高校生はこの「考える」プロセスに身を置き、自分のなかから意見や考えを取り出す作業ができたのではないか。「思考力」が伸びたと実感できたのはこのためだと考えられる。

一方、テーマに関する認識や意見の変化は見られたのだろうか。詳しくは上に見たとおりであるが、以下では、項目の一覧と賛否の増減について、「大いに賛成」における変化を大きな変化、「やや賛成」や「普通」における変化をそれに次ぐものとして考察する。

全体としてまとめると、まず、①、②、⑥に見られるように、『安心・安全を創るためには、「人と人とのつながりや信頼」が重要であり、「住民同士の熟議」を行うとともに、コミュニティの日常的活動が必要である』について肯定的意見が高まっている。次に、⑧、⑨、⑩に見られるように、『「安全か不便か」と問われれば、「不便も致し方ない」との考えへの変化が見られ、コミュニティのなかでは「地の人」の役割の重要性に気づくとともに、大学の役割についても認識が高まっている』ことがうかがわれる。

さいごに、他の項目では、③、⑦に見られるように、安全・安心を守るには、「行政だけでなく、住民が役割を果たすこと」、④「一人ひとりの能力の向上も重要であるが、力を合わせること」、⑤「施設や設備に頼るだけではいけないこと」については熟議前後で変化は見られず、熟議参加とは関係なくそのような考えをもっていたことがわかる。

①「人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」

→「大いに賛成」が増加

②「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」

→「大いに賛成」が増加

③「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」

→大きな変化は見られない。

④「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」

→「やや賛成」が減少、「普通」が増加

⑤「安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」

→大きな変化は見られない。

⑥「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」

→「大いに賛成」が増加

⑦「行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」

→大きな変化は見られない。

⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」

→「やや賛成」が増加、「やや反対」が減少

⑨「安心・安全を創るのは、地の人の役割であり、風の人は関わらないものである」

→「普通」が増加、「やや反対」が減少

⑩「大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」

→「やや賛成」が増加

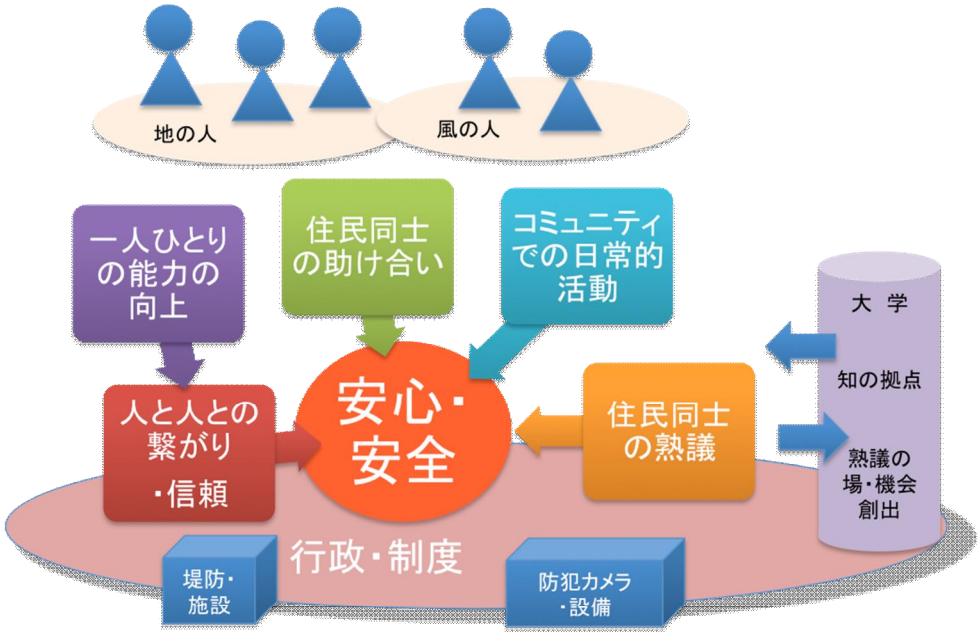

図 5-5-1　安全・安心をめぐる考え方を構成する要因間関係

（吉原惠子）